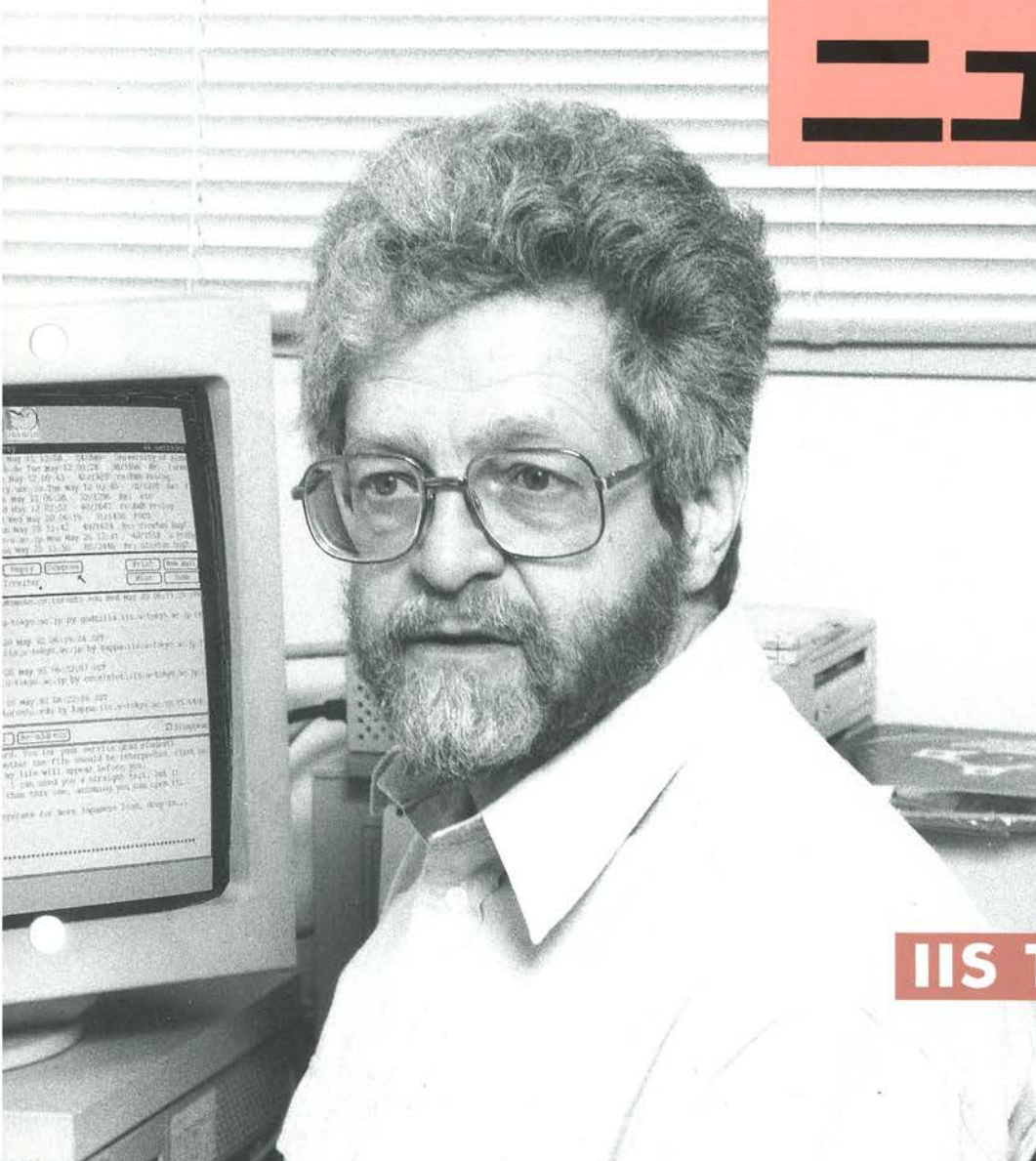


生研 ニュース

PHOTO 岡宮誠一

1992.7.10
No.17



IIS TODAY

●寄付研究部門
ハーベイ アブラムソン
教授

本所初めての寄付研究部門「インフォメーション・フュージョン(リコー)」の開設以来その客員教授として活躍されているのが先生。研究テーマは多言語間の機械翻訳、自然言語処理、論理プログラミング等。生まれはニューヨークだが、博士課程は英国で修了されその後もカナダ・英国の複数の大学・研究機関で国際的に活動されてきた。

流暢な日本語を操る先生はともかく、国際交流において問題となるのが言語の壁。そこで登場するのが先生の研究テーマである機械翻訳という訳だが、翻訳は人間に

とっても難しい問題。これを機械にやらせようというのであるからその道のりは相当険しい。学术论文のような専門的文章を対象としたシステムの実現でさえ、「今後20年の研究期間が必要でしょう。でもそれだけに、やりがいのある研究テーマです。」とおっしゃる。

趣味は自転車で、休日にはマウンテンバイクで自宅近くの駒沢公園で汗を流されている。また日本の文学に興味をおもちで、古いところでは谷崎・川端、最近の作家では村上春樹がお好みとか。

(K. S)

■ 盛況だった生研公開



2



恒例の生研公開が6月4日、5日の2日間にわたって行われました。当日は、好天に恵まれたこともあり、受付を通過した来場者だけでも約5000名と大変盛況でした。

恒例の講演会では、富塚客員教授（インテリジェント・メカトロニクス（東芝）が御自分の体験を踏まえて日米の大学の比較を試みられたほか、二瓶教授（第4部）、原教授（第5部）、鈴木教授（第1

部）、木村教授（第2部）の各先生がそれぞれの研究分野の概説や展望を講演されました。講演会とはときには予定の時間をはるかにオーバーするほどの熱演であり、また立見の方も出るほどでした。

各研究室では、実験設備の公開と実演、パネル展示などに工夫を凝らしておりましたが、プレゼンテーションツールとしてのコンピュータの利用がますます盛んにな

ってきたようです。

また、見学者と説明者、あるいは見学者同志が熱心に討論する光景が研究室や、時には廊下等でも見かけられましたが、これは生研の志向している「情報広場」としてのひとつの姿とも言えるものです。情報の発信地として、都市型研究所である本所の役割は今後ますます重要になってくることでしょう。（K. S）

国際災害軽減工学研究センター(INCEDE) 第1回講演会開催さる



5月13日第1会議室を会場に、国際災害軽減工学研究センター(INCEDE、発音はインジード)主催の第1回講演会『最近の自然災害から』が開催された。専門家でない人を対象に、「今、発展途上国

で起こっている自然災害の実態”を理解してもらうことを目的とした講演会である。所内外の聴講者約70名をお迎えして、以下の講演者とトピックで行われた。

●ヘーラト、A.S.助教授(INCE-

DE)：「1991年11月 フィリピン・レイテ島の洪水被害」

- 中埜良昭助教授(第1部)：「1992年3月トルコ・エルジンジャン地震—なぜ建物は壊れたか?—」
- 目黒公郎助手(INCEDE)：「1992年3月トルコ・エルジンジャン地震—被災した人たちは…—」
- 司会：片山恒雄教授(INCEDE、センター長)

国際災害軽減工学研究センター(INCEDE)では、今後もこのような講演会を開催していく予定です。専門に関係なく、興味のある方の御参加をお待ちしております。

(第5部 目黒公郎)

第1回生研院生歓迎懇談会

5月13日夕刻より第1、2会議室で、当所では初めての試みとして生研院生歓迎懇談会が催されました。原島所長あいさつ、白石世話人音頭による乾杯で始った会は、生研の若いパワーが会場からあふれんばかり。新入院生77名に先輩

院生、指導教官や他の職員も交え約160名の間に交流の花が咲き乱れました。「なんで今までやらなかったんだろう」など、来年もぜひと期待する声をそこに残しながら幕を閉じました。

(第2部、増沢隆久)



技術官等研修委員会発足—第1回技術発表会の開催決まる—

研修に関する基本問題について審議を重ねてきた技術官研修検討会の後を受けて、4月28日(火)に技術官等研修委員会が発足した。

委員会の要務は研修に関する企画・立案、研修の実施に関する連絡調整等であり、委員は各研究部教官1名、技術官1名、試作・電

算・映像からそれぞれ技術官1名、総務課長、経理課長の計10名で構成されている。

委員会活動の一環として本年から技術発表会を開催することが決定しており、この実施については研修委員メンバーに数名の技術官が参加した別組織、技術発表実行

委員会が運営にあたる。

開催日は9月21日(月)、会場は第1・2会議室、只今技術官のほか助手、教務系技官からの発表者を募集している。

(実行委員会 岡宮 誠一)

第51回文部省所轄ならびに 国立大学附置研究所長会議

5月26、27日の両日、文部省から山田官房審議官、高研究機関課長等を迎え、大阪千里阪急ホテルで標記会議が開催された。

この会議の目的は本誌No. 4に既報のとおりで、今年で第51回目、世話人校の大阪大学（各研究

所）担当で行われた。

1日目の午前、山田審議官ほか出席の各担当課長から文部省の当面の学術行政等について説明があり、午後は、各分科会の報告および協議、阪大名誉教授芝哲夫氏の講演ののち懇親会がもたれた。

2日目は、午前が各部会に分かれての協議、午後は、部会報告と全体協議などに当てられ、次期常置委員・役員等を選出して午後4時過に散会した。

(R. K)

VISITS · PERSONNEL

●外国人研究者講演会

4月16日（木）

司会：高梨教授

Dr. A. Y. Elghazouli

Earthquake Engineering Section, Imperial College London, UK
"Seismic Resisitance of Ductile SRC Structures"

Dr. A. S. Elnashai

Earthquake Engineering Section, Imperial College London, UK
"Selective Repair and Retrofitting of RC Structures Damaged by Earthquakes"

Dr. B. A. Izzuddin

Systems and Mechanics Section, Imperial College London, UK
"Advanced Nonlinear Dynamic Analysis of Steel Structures"

6月16日（火）

司会：前田助教授

Prof. A. Pelton

Director, Centre for Research in Computational Thermochemistry

Ecole Polytechnique De Montreal, Canada

"Introduction to F*A*A*C*T Thermochemical Database for Calculations in Material Chemistry"

6月18日（木）

司会：村上教授

Prof. Peter Bosselmann

College of Environmental Design University of California, Berkeley, U. S. A

"Planning Legislation in San Francisco and Toronto Designed to Protect from Adverse Wind and Microclimatic Conditions in Downtown Areas"

6月22日（月）

司会：龍岡教授

Prof. Isao Ishibashi

Old Dominion University, U. S. A

"Anisotropic Behavior of Granular Materials"

●客員研究員（1992. 6. 3現在）

氏名	国籍・現職	受入研究室
呉 健康	中国・シンガポール国立大学 システム科学研究所客員教授 (本務：中国科学技術大学教授)	第3部 高木研
任 昌福	韓国・韓国成均館大学校工科大学 建築工学科教授	第5部 原 研

●人事異動（平成4年4月30日～平成4年6月1日）

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(所属) ・現官職
4. 30	桂 マリ子	勲奨退職		文部事務官総務課 第2部業務掛主任
4. 30	面高 秋人	辞職		文部技官 (第3部)
5. 1	齋藤 秀雄	昇任	文部教官助手 (第4部)	文部技官 (第4部)
5. 16	八代 盛夫	昇任	文部教官講師 (工学部)	文部教官助手 (第4部)

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(所属) ・現官職
5. 31	曾我 芳明	辞職		文部事務官 (総務課出版掛)
6. 1	葛巻 徹	配置換	文部技官 (工学部)	文部技官 (第4部)
6. 1	郷田 桃代	採用	文部教官助手 (第5部)	

PERSONNEL

● 新任・昇任のご挨拶

第3部
助教授
荒川泰彦



緑深く、建物が分散的に配置された駒場の先端研から、いろいろな意味で対照的な生研にもどってまいりました。この4年余り、先端研がダイナミックに立ち上がる時期に当事者として関わることができ、研究および組織に関して多くのことを学びました。一方、この間、生研の方々にはいろいろな形で支援をいただきました。ただ、この4年間は一応外からの目で生研をながめてきたわけでありまして、その経験がこれから生研のために何かお役にたてばと思っております。生研、先端研いずれもすばらしい先生がそろっているわけでありまして、今後、この二つの組織にとってポジティブな形でキャンパス等の議論が今後進展することを期待しています。

第2部
助教授
川勝英樹



4月1日付けで第2部助教授に就任いたしました。これまで2年間の講師の間、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方に深く御礼申し上げます。私は原子オーダからナノメータオーダの領域での測定法や位置決めなど、主にメカトロニクス関連の研究をしています。今後、得られた機能要素を組み合わせる原子オーダの世界に入っていくと、意外な発見や、まったく新しい機能の実現ができるのではないかと考えております。

第1部
客員部門助教授
大野正弘



4月1日付で多次元数値情報処理工学部門の客員助教授に着任いたしました。これまではオリンパス光学工業

(株)において、物質の圧電的非線形性を利用した超音波の位相共役波の発生法と、その走査型映像装置への応用について研究を行ってきました。今後は、音波、光波等におけるこのような非線形現象についてさらに深く研究していきたいと思っています。皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第3部
講師
高橋琢二



4月1日付で第3部マイクロ波工学部門の講師になりました。3月末に荒川泰彦助教授（前先端研）のご指導のもとに大学院博士課程を修了して、ようやく社会人となった1年生です。これまでは学生として生研の活動に参加してきましたが、今後は以前とは違った立場から生研の活性化に少しでもお役に立ちたいと思っております。研究は、半導体中の電子、特に量子閉じ込め効果によって波動性を持った電子をいかに行儀良く振る舞わせるかを課題として行っていくつもりでおります。どうぞよろしくお願いいたします。

経理課長
北川嘉一



理工系の予算規模の大きな学部・研究所を6ヶ所も歩いてきたので、今度は予算額の小さな部局（事務量が軽いのではとの自分だけの独断と偏見ですか）に行けるかなと期待と、文部関係機関で講読されている或る刊行物の記事に側面からも援用？され、これからは呑気に過ごせるわいと楽観していましたら、あに凶らん、また予算規模の大きな処にくることになり、聊か困惑していましたが、仄聞によりますと、生研の皆様方は事務部に対して深甚なる御理解があるとのことなので、安堵して着任した次第です。事務部長の云はれるように楽しい職場づくりに参加させて戴きたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

AWARDS

●受賞

第2部	教授 中川威雄	科学技術庁長官賞 科学技術功労者	鑄鉄ボンド砥石による難加工材料の高効率精密研削法の開発	1992.4.15
第4部	教授 増子 昇	論文賞 (財)腐食防食協会	「3%NaCl水溶液中における高純度18Cr-14Ni鋼のガラス下すきま腐食のその場測定」防食技術39 238~246 (1990)	1992.4.22
第2部	教授 増沢隆久 技術官 藤野正俊	電気加工学会論文賞	高精度微細軸加工の研究(第1報)ーワイヤ放電研削法の開発ー	1992.5.18
第5部	教授 村上周三 助教授 加藤信介	空気調和・衛生工学会賞	学術論文「天井面給排気による局所流量バランス方式クリーンルームに関する研究」第1報・第2報	1992.5.19
第5部	教授 村上周三	空気調和・衛生工学会賞	学術論文「集合住宅の共用排気ダクト設計方法に関する研究」	1992.5.19
第5部	助教授 桑原雅夫	交通工学研究会論文賞	交通信号制御における交通需要の集合化に関する研究	1992.5.27
第5部	助手 目黒公郎	土木学会論文奨励賞	拡張個別要素法による複雑な形状の要素からなる媒質の挙動解析	1992.5.28
第5部	教授 龍岡文夫	土質工学会技術賞 (平成3年度)	短い面状補強材と剛な壁面を有する補強土擁壁工法の開発	1992.5.29

●武藤先生 叙勲



本年の叙勲で勲二等瑞宝章をお受けになった武藤義一名誉教授(第11代所長)の叙勲祝賀会が6月12日に如水会館で行われた。

INFORMATION

■生研国際シンポジウムのお知らせ

第9回生研国際シンポジウム「CWE'92」第1回数値風工学国際シンポジウムが8月21日~23日、日本風工学会の共催のもと日本建築学会、土木学会、

日本鋼構造協会の後援で開催されます。

会場は、東京大学山上会館です。参加ご希望の方は、第5部村上教授までご連絡下さい。

■第3回若手研究者海外派遣助成交付者募集について

平成4年度若手研究者海外派遣助成後期(3名程度)の募集を行います。

等からご案内があると思いますので奮ってご応募下さい。なお、締め切りは9月中頃の予定です。

応募方法等については、後日、各部主任、施設長

(奨励会)

■生研セミナー

コース	テーマ	講師	期日
175	技術者・研究者・事務職のためのパソコンプレゼンテーション	教授 藤井陽一	7月14日(火)
176	最新固定砥粒研磨法 ー遊離砥粒の固定化技術ー	助教授 谷 泰弘 元委託 河田 研治 研究員 助手 池野 順一	7月22日(水)
177	ニューラルネットワークの基礎と新しい展開	助教授 浦 環 助教授 橋本 秀紀	7月28日(火) 29日(木)



ご存じですか？ 八角形の迷路の謎



御真影を収める神社



戦車による訓練



当時の正門

生研の建物には少し変わったところがある。たとえば建物の平面(間取り)。中庭を設けて長四角になっているところまでは普通なのだが、その角を折り曲げ八角形にしている。所員の皆さんも日頃感じておられるように、廊下が直角でなくて斜めに曲がっているのは自分がどこにいるかわからなくなって困る。なぜこんな不便をあえてしたのかというと、責任は生研にはなくて、戦前の「麻布三連隊」にある。この建物は昭和3年に、当時の陸軍が歩兵第三連隊(麻布三連隊)の本部兼兵舎として作った物で、陸軍はここを模範兵舎とすることを考え、それで八角形にしたのだった。なぜ八角が模範かという、雨やぬかるみの日でも屋上をぐるぐる回って練兵(兵士の訓練)が可能だからである。

こうした昔の兵舎の面影は今ほとんど消えているが、わずかに残るものとしては正面玄関の左手の林の一角がある。通りがかりにでも見てもらおうとわかるが、石を積

んだしっかりした作りの基壇があり、その斜め後ろには土盛りがある。基壇の上には何かか撤去された跡は少なく、土盛りも半ば崩れているが、ここはその昔「御真影」を収める一角だった。このことがわかったのはここに紹介する古写真のおかげで、基壇の上には木造の小さな神社が立ち、御真影の本体は土盛りで囲まれたコンクリート構造物の中におかれていた。

麻布三連隊の模範兵舎として作られた後、昭和11年の「2.26事件」の舞台となり、反乱軍将兵はここの中庭に集結した後、六本木の交差点を経て溜池を通り、裏から首相官邸を襲っている。

日本の敗戦後、占領軍の兵舎となり(その名残りで同一敷地内に米軍ヘリポートと星条旗社がある)、さらに昭和36年わか研究所が千葉からここに転入し、都市型の工学研究所として今日にいたっている。

(第5部 藤森照信)

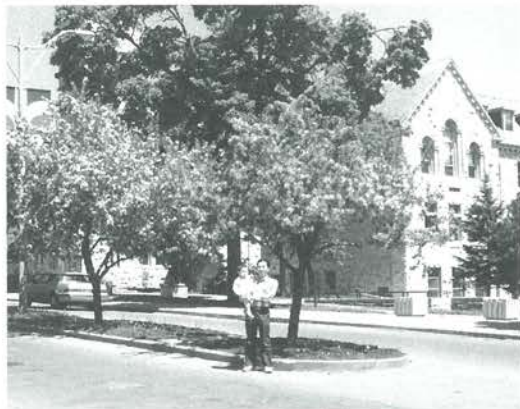


クイーンズ大学にて

第2部 助教授 須田義大

カナダ・オンタリオ(ONTARIO)州・キングストン(KINGSTON)にあるクイーンズ(QUEEN'S)大学に滞在し、1年余りが経過した。今年度はクイーンズ大学のSESQUICENTENNIAL(150周年)に当たり、色々な行事と巡り会うことができて幸いであった。ちなみに今年でカナダ建国125年であり、クイーンズ大学はカナダの歴史より古いのである。この春のCONVOCATION(学位授与式)では、当大学に留学経験のある日本の高円宮が名誉博士号を授与されるというイベントもあった。こちらの学位授与式は、入学者の1/4程度しか卒業できないとあって、大変威厳のある儀式である。スタッフ、卒業生全員がガウンをまとうのである。脚の無い椅子のようなものがひな壇の上にあるので何かと思っていたら、卒業生

全員が一人づつ卒業の証をそこにひざまづいて受け取るのである。教授も学生もこの儀式に誇りをもっているのを感じられ、日本との違いが思い浮かんだ。入学するのは大変難しいが卒業するのは比較的容易な日本の大学では、入学式の方が盛大になるのだと考えさせられた。

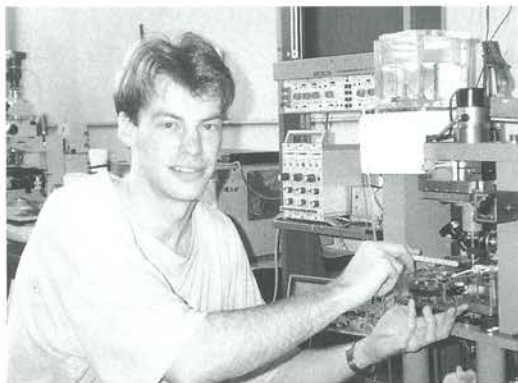


8



東大唯一のオランダ留学生

第2部 増沢研 ハンス ランゲン



私はオランダから来た留学生です。東大で唯一のオランダ人なので、このまえ、オランダ女王が来日したときは本郷でご挨拶する機会に恵まれました。

私は、一昨年の四月から、増沢研究室で微細加工の研究をしています。研究テーマはマイクロアSEMBリです。このマイクロアSEMBリというのは、放電加工で作った微細な物の組立のことです。

オランダと日本の大学の研究室はどんなところが違うかと言うと、オランダで研究する場合は日本の製品を買ってしまうので機械はすぐ作ることができますが、工程についてすべて理解するのはとても難しいのです。一方、日本では、日本の製品がたくさんあるのに、それを買えないために一生懸命細かい物でも自分の装置を自分で作ります。とても時間がかかります。工程についてはよく理解することができますが、それも最適な装置ではないのです。

3年間の博士課程で研究のアウトプットを最も増やすには、オランダ式と日本式の研究の間ぐらいが良いと思います。

編集後記

万歩計をつけてみてわかったのですが、雨の日に建物内を歩いているだけで三千歩くらいになることもあります。生研の廊下は何故こんなに長いのかと、疑問に思っていたところに今号の今昔物語のコラム。なるほど、八角形

の周回構造の廊下は兵隊の歩行訓練のためなのかと納得させられました。ともあれ、数々の知られざる事実を解き明かしてくれた今昔物語も今回で終了です。次の企画にご期待下さい。ところで、今はこの廊下もすべての階で1周できる訳ではありません。東半分にお住いの方は以外と御存知ないのでは？ (K. S)